



## TOVLAB での活動の展望と期待 「TOVLAB って、どんな場所？これからどうなる？」



### 【鼎談者紹介(写真 左から)】

岩手大学人文社会科学部4年生 大向 さつき

学生スタッフとして TOVLAB の設立初期から関わり、現場で活躍中。

ATOMica 代表取締役 Co-CEO 嶋田 瑞生

全国各地でコワーキングスペースの企画・運営を手がけ、TOVLAB の運営にも携わる。

manorda いわて(岩手銀行グループ) 地域商社事業部アソシエイト 藤原 百恵

岩手大学の卒業生であり、岩手銀行グループの地域商社として TOVLAB 連携を担当。

岩手大学副学長・地域協創教育センター長 司会 小藤田 久義

### ♠イーハトーヴ協創ラボ

<https://www.iwate-u.ac.jp/rcec/ihatov-lab.html>

地域と学生、教職員との協創活動を恒常的に促すとともに、新たなアイデアや取り組みを創出する場として令和6年秋に中央学生食堂2階に設置された学内コワーキングスペース。オープンな環境とセキュアな環境の両立を兼ね備えた学修・交流スペースとしての機能に加え、施設内にコミュニティマネージャーを配置し、利用者(学生・教職員に加え、企業・団体関係者、卒業生等)それぞれのニーズを把握しながら、課題解決や協働を促進するための各種ソフト事業を多様に展開。

小藤田

皆さま、本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今回の鼎談では、岩手大学地域協創教育センターが運営する「TOVLAB(イーハトーヴ協創ラボ)」について、これまでの活動を振り返りながら、今後の展望について語り合う機会にしたいとの思いから、この場を設けました。

TOVLAB は、全学部学生を対象とした共修プログラム「イーハトーヴ協創コース」と連携し、学生・教職員・地域の方々が交流・協働するためのコワーキングスペースです。地域と大学がつながり、共に新しい価値を創造する場として、現在さまざまな取り組みが進められています。本日は、TOVLAB に深く関わってくださっている 3 名のゲストをお迎えしております。

まずお一人目は、TOVLAB の運営業務を担っている株式会社 ATOMica 代表取締役・嶋田瑞生さんです。全国各地でコワーキングスペースの設立・運営を手がけておられ、TOVLAB の運営にも多くの知見を活かしていただいています。

続いて、manorda いわて所属の藤原さんです。岩手大学の卒業生でもあり、地域企業として TOVLAB に関わっていただいています。卒業生の視点から、学生とのつながりや地域連携について貴重なご意見をいただきます。

そして最後に、岩手大学人文社会科学部 4 年の大向さんです。学生スタッフとして TOVLAB の設立初期から関わり、イベント準備や動画制作など、現場で活躍されています。学生の立場から、TOVLAB の魅力や可能性について語っていただきます。

最初に、嶋田さんから TOVLAB の運営にあたり、運営者の視点からこれまでの活動を振り返って感じられていることや他機関での運営事例との違い等について、お話しいただければと思います。



嶋田

TOVLAB の運営には難しさもあります。他の地域でもいろいろなコワーキングスペースを手がけてきましたが、利用者層は本当にさまざまです。学生が中心のところもあれば、起業家や出張者、一般の方がより多く使うケースもあります。でも岩手大学の TOVLAB は、やはり“学生が主役”という印象が強いですね。特に面白いのは、教育プログラムと TOVLAB がしっかり連動している点です。これは全国的にも珍しくて、大学が本気でこの場を推進しているのが伝わってきます。学生も『使ってみよう』と思えるような空気があるのがいいですね。

また、東北の学生は、一見控えめに見えても、話しかけるとすごくしっかり応えてくれる。だからこそ、コミュニティマネージャーがタイミングよく声をかけることが大事で、TOVLAB ではその役割がしっかり果たされていると感じています。

実は最初に岩手大学で講義したときは、学生から反応がないのではと心配していました。でも TOVLAB の話をした後、“やってみよう”や“悩みごと”を WISH として書いてもらったら、60 枚以上の付箋が集まって。予想以上の反応に驚きましたし、学生の熱量の高さを感じました。

小藤田

ありがとうございます。では藤原さん、卒業生として、そしてイーハトーヴ協創パートナー企業である岩手銀行のグループとして、TOVLAB を通じた地域連携について感じたことを伺いたいです。提携講義やそこから広がった活動も含めて、実際にやってみて

どうだったか、率直なご意見をお願いします。

藤原

岩手大学を卒業して岩手銀行に入行し、こうしてまた母校と関われることがとても嬉しいです。私が在学していた頃は、地域の方と関わる機会は限られていて、アルバイト以外で地域に出ていくことは少なかった印象があります。でも今は、大学が積極的に地域との連携を進めていて、学生も自分から関わろうとする姿勢が強くなっていると感じます。提携講義では、グループワークになると学生が積極的に意見を出してくれて、講義後にも質問に来てくれるなど、熱意のある姿が印象的でした。最近では、地域イベントにも学生が関わってくれていて、TOVLABで説明会を開いた際も多くの学生が参加してくれました。こうした場があるからこそ、学生と地域が自然につながっていけるのだと思います。

小藤田

今の学生は、教わるだけでなく、自分で考えて動く力が育ってきている。そうした流れの中で、TOVLABのような場がタイムリーに生まれたのは大きいですね。学生のニーズに応える形で、TOVLABも地域連携の一端を担えていると実感しています。

藤原

社会人も学生の考えを知りたいと思っているのですが、なかなか接点がないんですよね。TOVLABのような場があることで、学生と気軽に交流できるのは、地域の事業者にとっても本当にありがたいです。

小藤田

では大向さん、学生スタッフとして感じるやりがいや、改善点など、今の率直な思いを聞かせてください。

大向

TOVLAB がすごくいいなと思うのは、学生が“やってみたい”を実際に形にできる場所

だということです。後輩が企画したプレゼン練習イベントも、最初は一人の思いから始まったのに、共感する学生が集まって広がっていったんです。やりたい気持ちはあっても表に出すのが苦手な学生が多い中で、TOVLABはその一步を踏み出せる場になっていると感じています。私は学生スタッフとして普段はイベントの周知やサイト運営、ポップ作りなどをしていきます。割り振られた業務に限らず、“どうすればTOVLABがもっと使いやすくなるか”を考えながら運営に携わっています。

藤原

学生が自分から企画に挑戦できるのは、大向さんのような学生スタッフがいるからこそ。同じ目線で関われることで、やってみようと思えるんですね。

小藤田

では、印象に残っているイベントや感想をぜひ聞かせてください。

大向

地元である八戸市の企業と夕食を囲みながら交流できたイベントが印象的で、リラックスして本音が聞けたのがすごくよかったです。

嶋田

本当にいろんな形がありますよね。食事しながら話すイベントは王道で、自然と会話も広がるし、働く人のリアルな姿が見えるのでいいなと思います。他の地域では、学生と企業が半年かけて商品開発するインターンや、社名を伏せて社会課題だけで企業を紹介する説明会もあって、地域で挑戦する企業に光が当たる場となり、とても意義のある会になったと思っています。就活って人生を左右する場面だからこそ、社名からの安心感に流されず、フラットに企業を見られる機会って大事だなって。TOVLABでも、大人も悩む姿など社会人のリアルが見える場をもっと作っていきたいと感じています。私自身、仕事=楽しくないというイメージがあった学生

の頃、自由な見た目で楽しく働く大人と出会って社会人のイメージが大きく変わった経験があって。TOVLABでも、一つの型にはまらず活躍する元気そうな大人と自然に接する場を作って、“あ、こういうパターンもありなんだ”と思える機会を増やしたいです。



小藤田  
TOVLABにより、社会人のイメージが変わっていききっかけになるかもしれませんね。では、藤原さんはこれまで様々なTOVLABの活動をされてきていると思いますけども、提携したイベントを通じて感じられたことを教えてください。

藤原  
毎週金曜日に岩手銀行の行員や岩手銀行グループの社員がTOVLABに来て、部署ごとに学生と交流していますが、“銀行ってこんなこともしているんだ”とイメージが変わったという声が多いです。制服もなくなってオフィスカジュアルになったり、地域と連携した事業やイベントもやっていたりして、学生の関心も高まっているんですね。ハヤシライスを楽しむ会みたいな食のイベントもあって、大学内でテストマーケティングができるのもすごくいいなと思っています。



小藤田  
学生に自社のことを直接伝えられる場って、すごく貴重ですよ。企業の方も学生と話すのはハードルが高いと感じているし、スタッフ側もどう取り計らうかというのが課題かなと。企業への働きかけ方、情報発信の仕方について、何かアイデアありますか？

大向  
そうですね、今やっていることとしては、来てくださった社会人の方に「この人は話しかけても大丈夫ですよ」という認識を作るために、コミュニケーションボードを活用する工夫をしています。あと、企業の方から顔写真と自己紹介文をいただいて、企業紹介ボードを作って貼っていますが、今後は学生が付箋で質問を貼って、それを企業の方に伝えるような仕組みも作れたらいいなと思っています。

小藤田  
良い取り組みですね。嶋田さんにお伺いしたいのですが、岩手県内の企業ではインターンシップに対して「難しそう」と感じている方が多い印象があります。そこで、企業向けにインターンの進め方や企画の仕方を学べる講座のような取り組みがあっても良いのではと思うのですが、そういった活動は何か実施されていますか？

嶋田  
インターンシップは、企業側が忙しかったり、専任担当がないこともあり、企画から運営まで私たちが入るケースが多いです。外部人事部のような形で支援し、企業には報告会などに参加してもらうスタイルですね。インターンは首都圏では一般的になりつつありますが、地域によってはまだ馴染みが薄く、企業側も「難しそう」と感じている印象があります。まずは全体像を伝え、怖いものではないと理解してもらうことが大事だと思います。説明会なども今後やってみたいですね。

小藤田  
パートナープログラムに参加している企業の一番のニーズは、学生との接点の持ち方が分からないことだと思います。自社に合った関わり方の選択肢が見えると、TOVLAB をうまく活用しようという流れにもつながるはず。インターン実施側向けの説明会があると、企業も「うちならこれができそう」とイメージしやすくなり、逆に提案も出てくるかもしれません。そうしたアイデアを共有しながら、実践につなげていけたらと思っています。大向さんはインターンシップの経験はありますか？

大向  
営業の方に同行して実際の仕事を体験できたインターンがとても面白く、文章だけでは分からない仕事のリアルが見えました。また、TOVLAB で行ったビジネスプランを企画・発表するインターンも、主体的に取り組めて印象的でした。受け身ではなく、自分で考えて動くことで学びが深まったと感じています。



小藤田  
課題解決型インターンシップを企画する際、企業が取り組む課題はどのように選定されているのでしょうか？

嶋田  
インターンシップの課題を大きく分けて、地域課題と企業課題の 2 種類とし、地域の特色や企業の状況に応じて選定しています。観光や工業が盛んな地域では地域課題が扱いやすく、人口が多い地域では企業課題が中心になることが多いですね。学生が企業の課題に関わることで理解が深まり、企業への印象も変わるケースが多いです。銀行

業務なども、実際に体験することで B to B の仕事や地域商社の意義などが伝わりやすくなります。問いの立て方が重要ですね。

藤原  
銀行本体やグループ会社では、仮想の村を設定し、人口や特産品などの条件をもとに、学生が地域活性化の企画を考えるシミュレーション型インターンを実施しています。業務紹介を通じて、学生がアイデアを出しやすい環境を整え、ホームページ制作や SNS 発信などの提案も生まれています。学生が主体的に関わることで、企業側も新たな気づきが得られ、双方にとって有意義な取り組みになっていると感じています。

小藤田  
そうですね、岩手銀行さんみたいな規模だからこそできる部分もあるとは思いますが、同じ業界の複数企業が連携して業界理解を深めるインターンという形も、やり方次第では十分あり得ると思うんですよね。そういう事例ってありますか？

嶋田  
そうですね、同じ業界の企業が集まって業界全体を知ってもらうという取り組みも、事例としてあります。例えばメガバンク 3 社が集まって、それぞれの違いや特徴を学生とディスカッションする場を作ったり、業種の違いをジャンルとして伝える合同説明会も面白いと思っています。学生主体の拠点である TOVLAB だからこそ、これまでにない挑戦的なイベントもやってみたいですね。

藤原  
それは学生にとってすごく聞きたい話だと思います。インターンとは違う視点の企業説明会で、先輩が会社を選んだ理由を話してくれたり、ご飯食べながら話せる場があるといいなって思います。

大向  
私もすごく聞いてみたいです！低学年の子が入りやすい雰囲気ですし、

TOVLAB も今は低学年中心に利用されることが多いので、早いうちから興味を持ってもらえる場があるのはすごくいいと思います。

小藤田

低学年向けの企業や業界説明って、キャリア教育の面でもすごく大事ですよ。就職活動とは違って、世の中の仕事や仕組みをフラットに知る機会があると、視野が広がっていいと思います。

藤原

地域で盛んな産業やどんな企業があるかを知っているだけで、就活のときの視点が全く変わると思うんですよ。事前に情報を集める中で自分の就職活動の方向性も自然と見えてくる気がします。

小藤田

企業同士のつながりって面白いですよ。取引の流れをイベントで見せるのも良いと思います。地元企業の関係性を知ること、就活とは違った学びになりますし、キャリア教育にも役立ちます。

TOVLAB は学生のキャリア支援が中心ですが、産学連携や共同研究も今後の可能性として考えていくべきですね。地方大学では企業や教員の数に限られているので、うまくマッチングするのが難しいですが、他の地域の事例も参考にできるかもしれません。

嶋田

地元企業との産学連携は最終的な目標として良いと思いますが、段階的に広げるアプローチが現実的だと感じています。まずは連携に慣れている企業と成果を出し、その事例を周囲に広げていくことで、地域にも波及していく流れが自然です。コミュニティマネージャーが関係構築を担い、URA が研究と社会ニーズを繋ぐ役割を果たすことで、うまく回っている大学も多く見られます。



小藤田

春に先行大学を視察した際、地元を巻き込んで大きく展開している様子に驚きました。最初から地元中心ではなく、徐々に広がっていった印象を持ちました。

嶋田さん

その大学は、地元企業の支援を受けて設立された背景もあり、産学連携が自然に循環している印象を持っています。ただ、理系中心の構造であり、地域性を軸にした文系的な連携とは異なる展開が求められると感じています。

小藤田

産学連携が人材の確保にもつながるといったようなこともありますよね。

嶋田

人材の流動性が高まるというありますし、関わった学生がそのまま入社することもありますよね。こういう場があるからこそ、素敵な出会いが生まれるのだと思います。

小藤田

文系・理系問わず、卒業研究で地域課題に取り組むケースもありますよね。特に文系だと、その経験が印象に残って、卒業後も関わりたいと思う学生もいると思います。企業や自治体に進むきっかけにもなりますし、TOVLAB でそういう地域とのつながりを作っていけたら面白いと考えています。最近では学生が地域課題に取り組むプログラムも増えていて、TOVLAB を成果発表の場として活用する動きも出てきています。

藤原

研究室単位で「こんな研究しています！」と社会人にプレゼンするのは、すごく良い取り組みだと思います。

小藤田

地域課題に取り組んだ学生の発表は学内で行われているけど、地域の方が目にする機会は少ないのが現状です。TOVLAB で企業とつなげて、もっと面白く発信できたら良いと考えています。今は食やお酒などに関連したイベントや活動に加えて、学生発案で地域課題に取り組む動きも広がっていて、成果発表の場として TOVLAB を活用する流れも出てきています。設備面ではスペースが足りないという声もあるので、今後は拡張も視野に入れて、柔軟に展開していけたらと思います。

やりたいことが自由にできる場って大事ですよ。TOVLAB も今、学生の利用が増えてきて、午後の時間帯はちょっと手狭になってきた印象があります。設備面の限界も見えてきているので、将来的には拡張も視野に入れて、現実的に考えていくタイミングかもしれませんね。まだ余裕があるのか、今すぐに準備が必要なのか、判断が難しいところです。

大向

お昼の時間帯はすぐに人がいっぱいになって、使えずに帰ってしまう学生も多いのですが、それ以外の時間はそこまで混雑していないので、使いたい人はちゃんと使えていると感じています。

小藤田

先日、役員懇談会で TOVLAB の話題が出て、学生から「ちょっとハードルが高い」と感じているという声がありました。特に 1・2 年生と 3・4 年生ではイメージが違うのかもしれませんが。実際、みんなが TOVLAB に対してどんな印象を持っているのか気になります。もっと気軽に使える場として認識されると良いなと思います。

大向

そうですね、1 年生は気軽に来てくれるのですが、4 年生などの上級生は TOVLAB の存在を知らない人も多くて、「自分も使っているんだ」という認識が広がっていないことが今の課題だと感じます。

小藤田

TOVLAB がある場所は文系の学生には目につきやすい一方で、理系の学生は研究室に入ると中央食堂に来る機会も減るので、TOVLAB の存在が知られにくいということもあるかもしれません。特に入口が少し入りづらい構造になっているので、1 階にスペースがあるともっと気軽に使えるようになると思います。地域協創教育関連の講義では TOVLAB を活用するよう促しているので、1・2 年生には少しずつ浸透してきていると思います。

藤原

先生方が社会人との交流を促してくれるので、自然と TOVLAB の存在が学生に浸透してきていると感じています。今の 1・2 年生が成長するにつれて、もっと親しみを持ってくれると思います。

小藤田

最後に TOVLAB に期待することを一言ずつお願いします。

嶋田

TOVLAB は、今や全国的にも注目されるような存在になってきていると思います。大学や地域、学生の期待がうまく重なった、すごく良いタイミングで始まった取り組みですよ。このまま今の流れを大事にして、より一層取り組みを拡げていきたいです。TOVLAB のような場が「なんでうちの地域にはないの？」って言われるくらい、当たり前存在になっていくと良いなと思います。岩手発のこの仕組みが、他の地域にも広がって、学生や企業が自然に関わり合える拠点になっていくと嬉しいですね。

藤原

嶋田さんのおっしゃる通りで、岩手大学の TOVLAB は本当に恵まれた環境だと思います。地域の事業者と学生が自然に関わる場って、全国的にも珍しいですよ。学生発案のイベントも増えてきて、自分から動く力が育っているのを感じます。ちょっと入りづらいと感じる人もいるかもしれませんが、誰かの興味を知ることは、社会に出たからのコミュニケーションにもつながっていくと思います。TOVLAB はそういう力を育てる場として、もっと多くの学生に活用してほしいと思っています。

大向

初めての方でも安心して利用できるように、学生スタッフが常駐しています。「何をすれ

ばいいかわからない」「少し不安…」という方にも、スタッフが丁寧に声をかけ、サポートします。私たちもコミュニティマネージャーと連携し、より多くの方に気軽に足を運んでいただけるよう工夫を重ねています。まずはぜひ、一度 TOVLAB へ来ていただきたいです。

小藤田

今日の話の中で、TOVLAB の今後の展開や、インターンシップ、産学連携、地域との関わり方など、いろいろなヒントが見えてきた気がします。まだ TOVLAB に馴染みのない方にも活用イメージや魅力が届くように、我々も努力していきますので、皆様のご協力を今後ともよろしくお願いいたします。

**協創を生み出す Hub イーハートヴ協創ラボ [TOVLAB]**



**多様な仲間が出会う場**  
学生と地域社会の交流拠点



**新たなアイデア創出の場**  
創造的な取り組みを生み出す



**交流・協創を促す場**  
恒常的な対話と協働の促進

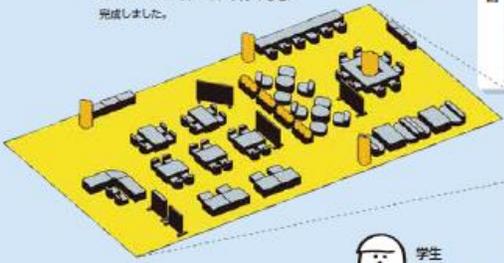


**クリエイティブな飛躍の場**  
新しい活動への挑戦を支援

コミュニティマネージャーが常駐し大学・地域・自治体・企業の交流と協創活動を積極的にサポート。

**トヴラボ みんなが集まる場 TOVLAB**

地域と学生・教職員をつなぎ、交流や協創活動を通じて多様な仲間が出会い、新たなアイデアや取組を生み出す大学内コワーキングスペースです。学生と地域との交流・協創を恒常的に促す場として、オープンな議論とセキュアな議論の両立を兼ね備えたコミュニケーションスペースが大学中心地に完成しました。



**利用料** 個人：1,000円/日  
団体：1人あたり50,000円/年  
岩手大学の学生と教職員：無料

**初期登録料** 無料

**共有席** 44席(イベント利用時60席)

**ディスプレイ** 86型1台・50型2台

**貸出機材** モバイルバッテリー・充電器・プレゼン機材等  
※詳細は下記の二次元コードまで確認ください。

**その他** 館内での飲食可能

**TOVLAB に集まる人々**

さらに…多様な企業・自治体・NPOがパートナープログラムで続々、参画しています！



**講師**  
ビジネスやインバシジョンのエキスパートの教授たちをはじめ、各専門分野の機関たちが参加しています。



**ベーパー**  
(社会人伴走者)  
イーハートヴ協創コースで受講者の学びに寄り添いつつキャリア形成をサポートする現役社会人の皆さんも参加します。



**学生**  
コース受講生はもちろん受講していない学生も、休学や履修など様々な思いの方が可能です。



**コミュニティマネージャー**  
TOVLABには専属のスタッフが常駐し、マッチングやネットワークを促進します。

**TOVLAB 利用方法**

- ① 中央食堂に行く
- ② 図書館入り口近くの階段を登る
- ③ 入館手続きを行う(初回のみ実施)
- ④ 好みの席を選ぶ
- ⑤ 勉強やおしゃべりなど自由に利用する

入館前に TOVLAB の LINE を友達追加すると手続きがスムーズ！

